

佐竹義輔*： ワニグチソウ類の1新種

Yoshisuke SATAKE*： A new species of *Polygonatum* - Bracteatae

1968年5月3日、清水大典氏がワニグチソウ類（ユリ科）の新種らしいものを山形県西置賜郡小国町荒川峡にある片洞門で採集した。生育地は第三紀層礫岩の東向き断崖の中間にある猫の額ほどのせまい、低木まじりの草付斜面で、あまり人の近づかないところ、タニウツギ、シナノキ、コバノトネリコ、バイカウツギ、ヤマモミジ、マルバマンサク、シモツケ、ケヤキなどの低木や、クサボタン、クマイチゴ、カワラボウフウ、カワラマツバ、エチゴキジムシロ、コアカソ、オオバギボウシ、オヤマボクチ、アオヤギソウ、クロバナヒキオコシ、タムラソウなどの草本が生えている環境である。以前にワニグチソウ類をまとめた（本誌 18: 30-31, 1942）筆者に連絡があり、5月15日、つぼみをもつ3株を持参した。浦和の自宅で栽培したところ、1株だけが6月6日に開花した。しらべて見ると確かに興味ある一種であるが、1個体だけで新種と決めるわけにもいかない。原地をさらに探してもらったがどういふわけか1株も見つからないので来春をまつことにした。昨年（1969）5月、清水氏は原地をたずね数株を得、2株筆者に送ってきたので栽培したが開花しなかった。幸い前年植えた1株が5月18日に開花したので、前年開花したものと合せてしらべた結果、新種と考定し、報告することにした。新名は産地にちなみ、ドウモンワニグチソウ *Polygonatum domonense* とする。

植物体はやや繊細で、根茎は白色円柱状でアマドコロとナルコユリの間中型、茎は緑色であるが紫褐色の斑紋があり、基部に1~2個の膜質鞘状葉がある。花は1花序に2~4個つき、苞は披針形繊弱でワニグチソウのように1個所に集まることはない（後述）一見異なる感じをうける。

さて本種を新種と考定するのは既知種と比較し、次のような特徴が認められるためである。1) 花被筒は基部が細くさきぶとりで、その内面に著しい粒状突起がある。この傾向は他種にも多少あるが、本種ではとくに顕著である。2) 花糸の離生部は円柱状（横断面は円形）で、花被筒内面と同じ粒状突起があり、さらに1~3細胞からなる短毛がある。ワニグチソウ (*P. involucratum*)、コワニグチソウ (*P. miserum*)、コウライワニグチソウ (*P. desoulavii* var. *yezoense*) では、花糸離生部は左右扁圧（横断面は長だ円形）で平滑またはわずかに粒状突起があるが短毛はない。ウスギワニグチソウ (*P. cryptanthum*) の花糸離生部は本種に似ているが平滑で突起も短毛もなく、苞や花

* 埼玉県浦和市

Urawa City, Saitama Prefecture.

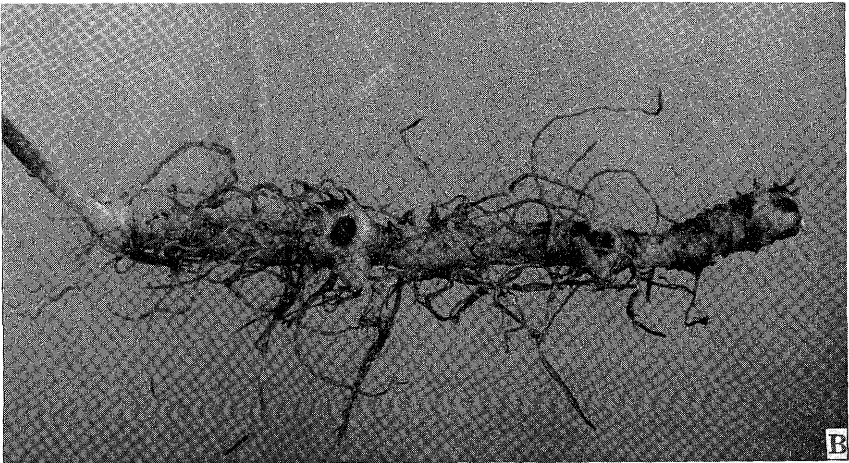
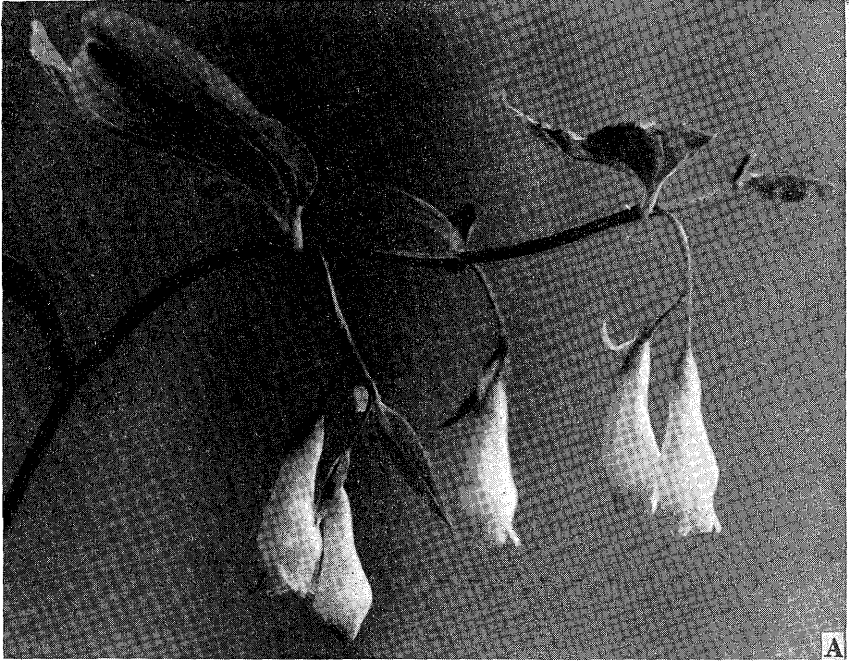


Fig. 1. *Polygonatum domonense* Satake. A. Three inflorescences, \times ca. 1. B. A rhizome, \times ca. 1.

柄に短毛がある。花糸離生部に 2-3 細胞からなる短毛がある点では最近記載されたタカオワニグチソウ (*P. desoulavii* var. *azegamii*) に似ているが、これは苞が大形で、花糸離生部は圧扁形に近い。3) 苞は小形の披針形で無毛、花柄の頂端(小花柄の基部)にあるが、花柄の長さがちがうため、互生しているように見える。そして最下部にある苞は鱗片状に退化し、ときに欠如している。

ここでワニグチソウ類の苞の位置について注意しておきたい。筆者(1942)も、大井博士(日本植物誌、英語版とも、1965)も、苞は小花柄の中部に、上部に、あるいは基部につくとかいつているが、これは訂正した方がよいと考える。つまり、苞はつねに花柄 peduncle の頂端(いかえると小花柄 pedicel の基部)につくのである。花柄の中部や上部につくといったのは見かけ上のことであつた。

ワニグチソウ (Fig. 3, A) では、葉腋から 1 個の花柄 a がでてその頂端にふつう 2 個の苞 c がつき、その腋から 2 個の小花柄 e がでてそのさきに花 s がつく。この花柄をよく見ると、縦に明かなくびれがあり、2 個の花柄が癒合したものであることがわかる。各地の標本をしらべると、3 個の花あるものでは癒合した 3 花柄の長さが少しづつちがうので 3 個の苞も少しずれてついているものがあるのでこの考え方は誤りではないと思う。

コワニグチソウ (Fig. 3, B) では、花柄 a は中途から分離し(つまり下部だけが癒

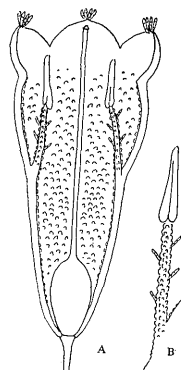


Fig. 2. *Polygonatum domonense* Satake. A. Longitudinal section of a perianth-tube, showing a pistil and two stamens, $\times 2$. B. A stamen, $\times ca. 3.3$.

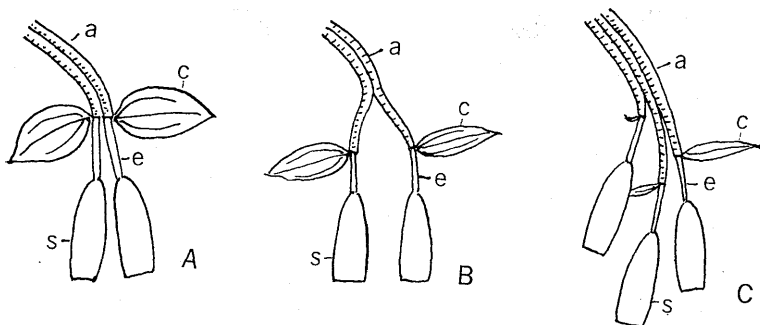


Fig. 3. Schematic drawing of three types of inflorescences in *Polygonatum involucratum* (A), *P. miserum* (B), and *P. domonense* (C). a, peduncle; c, bract; e, pedicel; s, flower.

合) その頂端に苞 c がつき、そこから小花柄 e がでる。花柄の分離した部分からさき
が小花柄に見えたので苞は小花柄の中部につくとか上部につくとかいったのである。
これから類推すると、ドウモンワニグチソウでは (Fig. 3, C) 3個の長さのちがう花柄
が中途まで癒合したと考えられ、もっとも短い花柄の頂端にある苞が鱗片状に退化した
か欠如したと見てよい。この花柄の癒合についてはいずれ組織学的にしらべるつもり
である。

Summary

Polygonatum domonense Satake, sp. nov.

Herba perennis. Rhizoma repens, album, 5–10 cm longum, 5–6 mm crassum. Caulis teres, 20–28 cm altus, basi 2–3 mm in diametro, apicem 5-foliatus. Folia elliptica vel ovato-elliptica, 5–7 cm longa, 2.5–3 cm lata, apice acuminata, basi rotundata, glabra, 7-nervata, subtus pallidiora, breve petiolata. Inflorescentia axillaris, 2–4-flora; bractee lanceolatae vel lineari-lanceolatae, 10–16 mm longae, 2–4 mm latae, glabratae, acutae. Flores penduli, albescentes, 16–21 mm longi, basi 2–4 mm et apice 5–8 mm lati, tubo intus prominente tuberculato, segmentis intus apicem viridescentibus clavato-pilosis. Stamina 6, filamentis filiformibus 4 mm longis tuberculatis et sparse pilosis, antheris oblongis 3 mm longis. Pistillum glabrum, ovario obovato 5 mm longo, stylis 15 mm longis. Fructus et semina ignota.

Hab. Honsyu: Katadomon, Oguni-cho, Yamagata Prefecture (collected by D. Shimizu, May 3, 1968 and flowered at Urawa City, June 6, 1968—Holotype in TNS, n. 248910).

According to Mr. D. Shimizu who found this new plant, its habitat is a narrow slope of the tertiary conglomerate cliff (about 240 m alt.) at the left side of the Arakawa River, covered with *Clematis stans*, *Peucedanum terebinthaceum*, *Rubus crataegifolius*, *Hosta montana*, *Boehmeria spicata*, *Potentilla togasii*, *Isodon trichocarpus*, *Galium verum*, *Synurus pungens*, *Miscanthus sinensis*, *Serratula coronata*, *Spiraea japonica*, *Tilia japonica*, *Hamamelis obtusata*, *Fraxinus lanuginosa*, *Weigela hortensis*, *Philadelphus satsumi*, *Zelkova serrata*, and *Acer matsumurae*.

Polygonatum domonense has a green stem tinged with purplish brown color, 1–2 membranous sheathed leaves in the lowermost part, inflorescence composed of 2–4 flowers on the peduncles of different length, and lanceolate bracts (the lowest one sometimes reduced to a scale or disappeared). It is

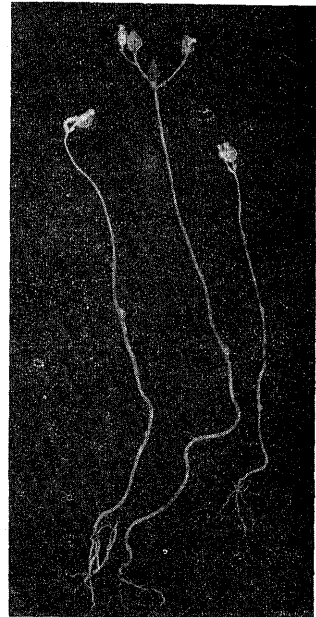
clearly distinguished from *Polygonatum involucreatum*, *P. miserum*, and *P. desoulavyi* var. *yezoense* in having lanceolate bracts and string-like filaments covered with tubercles and sparse short hairs consisted of 2-3 cells. The plant is, on the other hand, near to *P. cryptanthum* in the shape of filaments, however, the latter has glabrous filaments and pubescent bracts, peduncles and pedicels.

○高等植物分布資料 (69) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (69)

○ハコネシダ *Adiantum monochlamys* Eaton 本植物の太平洋岸の北限について、故菊地政雄氏は陸前高田市矢作町をあげられているが、更に北上していることが、遠野市土淵町の三浦徳蔵氏によって、1966年6月明らかにされている。そこは岩手県下閉伊郡川井村繋、小国川沿いの岩壁である。筆者は、三浦氏の案内で1969年10月15日同地を踏査し自生を確認した。
(岩手県遠野市 小水内 長太郎)

○キリシマシャクジョウ *Burmattia liukiensis* Hayata 1969年10月6日、高知県土佐清水市白皇山より北の通称大柴山の頂上の533mの暗い樹林下でヒナノシャクジョウ属のものを採集した。調べたところキリシマシャクジョウで、九州南部から琉球に分布しているもので、四国では未記録であることがわかった。生育地はイスノキ、タブノキ、スダジイなどの樹木が混生し、その落葉が腐葉土化した中に発生していた。その時の照度計は1-2の暗さであった。この付近は観光開発で、現在土佐清水市より足摺岬まで、山上にスカイライン道路の建設中で、明年3月に完成し、完成後に保安庁の航空標識燈が採集地近くに建てられる予定といわれるので、近く自生地は消滅することになる。標本は東京大学理学部におさめた。

(高知牧野植物園 武井近三郎)



Burmattia liukiensis ×0.5
Phot. by Mitsuko Sawada